

2016年度自己点検・評価報告書の作成を終えて

教育支援本部担当常務理事

自己点検委員会委員長 佐藤 良一

『自己点検・評価報告書』の作成・公表は、今回で第8号を数える。スポーツ健康学研究科、人文科学研究科日本学インスティテュート、連帯社会インスティテュート、スポーツ・サイエンス・インスティテュートが新たに加わり、今年度の点検評価単位は、15学部、通信教育課程(法・文・経済)、1機構、15研究科、3インスティテュート、そして15研究所というように大きな規模になった。点検項目が広範囲にわたる教学関係を取りまとめる作業は容易ではないが、各部局での点検活動の経験は着実に継承され、本学の評価体制は安定的に維持されている。本報告書作成に尽力された関係各位に心から感謝したい。

自己点検活動の本年度方針として、次の三点が定められた——(1)今年度2012年度認証評価結果への対応、(2)各部局における主体的な自己点検・評価活動の継続、(3)グローバル化への対応。この方針の下に各部局は適正に自己点検活動を進めたと概ね判断できるが、さらに発展・深化させるという観点からすれば、課題も残されている。長期的視野においてグローバル展開する大学にとっての評価のあり方はどうあるべきかという問題である。つまり、大学基準協会が定める基準および点検・評価項目に沿って行われる自己点検活動を長期ビジョン、およびそれと密接に関わるグローバル戦略とどのように有機的に接合していくかという問題である。

アクション・プラン、ロードマップを検討する段階に至った長期ビジョンHOSEI2030策定作業、スーパーグローバル大学として三年目を迎えてのグローバル戦略の再定義、英語学位プログラムの開設等々。さらに、学位授与、教育課程の編成・実施、入学者受け入れの三つのポリシーを一体性・一貫性・整合性という視点からの再策定。このように、教学分野でその内容を多様化・豊富化していかなければならないことは多い。ルーティーン化するまでに至った自己点検・評価活動は必要不可欠であるのはいうまでもないが、それに自足することなく、環境の変化に対応して自己点検・評価活動を〈教育・研究活動の改善に活かす〉という原点に立ち戻る必要もあろう。

単に認証評価を目標とするだけでなく〈本学のあるべき教育・研究の姿〉を確立するために今後の自己点検評価活動は活かされねばならない。グローバル化した/しつつある世界で本学が名実共にグローバル展開・存続していくために、自己点検活動が、評価のための評価=悪しきルーティーンに陥ることなく、目的実現のために実効性をもたねばならない。それは、各評価単位の戦略的意思決定に活かされることを含意している。今後の自己点検評価活動がさらに意義あるものに育っていくことを期待している。